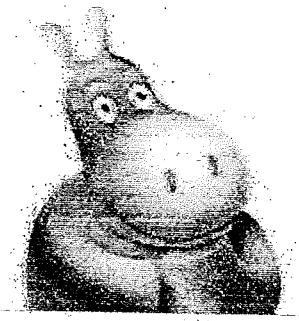
ことばが関西弁

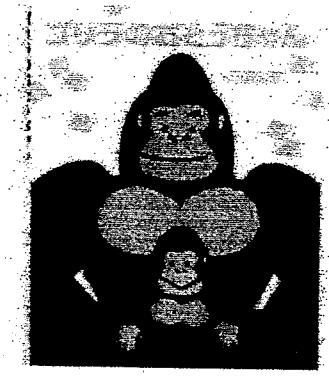
個人会員　城野裕紀子

「ごろはちだいみょうじん」　中川正文 さく　梶山俊夫 え
福音館書店　1969

“ごろはちだいみょうじん　いうても、かみさんのことやない。たぬきのはなしや。・・・”で始まるこの絵本。村人にちょっかい出すごろはち。私が初めて出会った関西弁の絵本です。「子どもが初めて出会う絵画が絵本なら、心して描かなければいけない」とおっしゃった梶山先生の言葉も印象に残っています。

「ぼちぼちいこか」マイク＝セイラー さく　ロバート＝グロスマン え
いまえよしとも やく 偕成社　1980



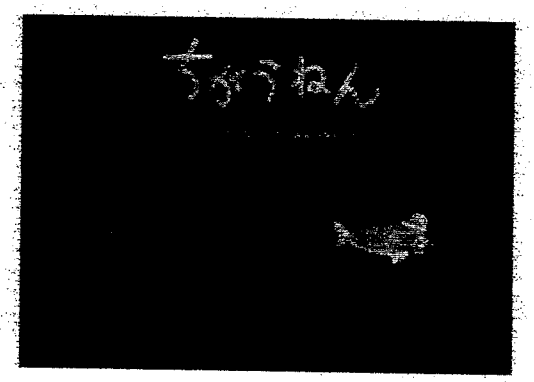


翻訳が関西弁になって、広まった絵本やとか。「そうそう、ぼちぼち行きなはれ」と声をかけたくなります。

「ゴリラのおとうちゃん」　三浦太郎 作
こぐま社　2015

本陰でお昼寝中のおとうさん。そこへ子どもが“なあ おとうちゃん あそんで～や”。とやってくる。こどものゴリラ、たのしそうやなぁ。見ていてこちらまで顔がほころんできます。

「どこいったん」
ジョン・グラッセン／作
長谷川義史／訳
クレヨンハウス　2011



「ちがうねん」
ジョン・グラッセン／作
長谷川義史／訳
クレヨンハウス　2012

関西弁の翻訳は今江さんと思い込んでいました。ところが長谷川義史さんがこんな風にして私たちの前に出してくださった。「うさぎはどこいったん？」「ぼうしをかぶっていた魚はどうしたん？」ちょっとブラックですが、印象に残ります。

＜ねことといっしょに＞

もみじ文庫　千代田眞美子

『ホレイショ』　エリナー・クライマー文　ロバート・クァッケンブッシュ絵
阿部公子訳　こぐま社　1999

ホレイショは、ケイシーさんと町なかのレンガ造りの家にくらす気難しやのねこ。優しい彼女は、困っている犬やうさぎ・鳩、隣の騒がしいこども達まで大歓迎。うんざりしたホレイショは家を出るが、帰ってきた彼の後には？表紙と最後の頁の表情を比べてみて。

『ぼくのミラクルねこ　ネグロ』　オスバルド・ソリアーノ作
ファビアン・ネグリン絵　宇野和美訳アリス館 2003

ブエノスアイレスから両親とパリに移ってきたぼくは、動物愛護協会でネグロと出会った。ある冬の日、ネグロはエッフェル塔から故郷の街を見せてくれた。白黒のお洒落な絵本だが、あとがきを読むと厳しい背景がわかる。

『ルドルフとイッパイアッテナ』　齊藤洋作　杉浦範茂絵　講談社　1987

魚屋のおやじにおっかけられたぼくは思わず大型トラックに飛び乗り、目が覚めたら見知らぬ大きな町にいたってわけさ。さあさあはじまる大冒険。イッパイアッテナって何？なんていってないではやく読んでみてよ。続・続々・続々続巻もあるよ！

『ポーラをさがして』　さなともこ作　杉田比呂美絵　講談社　1997

５年生の私とカナは塾ともだち。電柱の迷子猫の張り紙を見て家を訪ねると白髪の上品なおばあさんで、たっぷりのお礼と言う言葉にひかれ猫探しを始めるが、実はポーラは・・・

『猫は生きている』　早乙女勝元作　田島征三絵　理論社　1984

1945年3月10日の東京大空襲の夜、野良猫の稲妻は住みついていた家のおかあさんや昌男を見送った後、４匹の子猫たちと生き抜きます。辛い話ですがこどもたちにも知ってもらいたいと思います。わたぼうし文庫さんが人形劇にして戦争展でも何回か上演しました。こどもたちとやってみたいと思われたらご相談ください。

遊ぼう！　手作りおもちゃの本

個人会員　　吉村　悦子

みなさんよくご存知の古くからある本ですが、古い人間のわたしの虎の巻です。

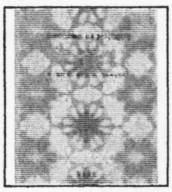
1、「おはなしおばさんの小道具」（シリーズつくってああそんで）藤田　浩子編著　一声社　1996
「続おはなしおばさんの小道具」　1998

藤田浩子さんのおはなしを８月７日にＹＷＣＡで楽しみました。（藤田さんのあのパワーに脱帽）藤田さんは、よく手作りの小道具を紹介してくださいます。おはなしにあまり馴染みのない子やあっちの方を向いてる子、おはなし会でちょっと困ったとき、小道具があれば身を乗り出して聞いてくれます。遊んでも楽しい、そんなアイデア満載の本です。

2、「かわいい♥びっくり！動く手作りおもちゃ」　芳賀　哲著　一声社　2013

身近な材料で作れるおもちゃ、子どもが作ると表情がなおかわいい。型紙も付いているので迷いなく作れます。

3、「ひまわり文庫の伝承手づくり遊び　第１巻　使ってあそぶ」　　徳村　彰・杜紀子文
「第２巻　飾ってあそぶ」　「第３巻　染めてあそぶ」　　なかやま　ひろこ絵
草土文化　1977



手元にあるのは、1988年　第18刷、本棚に並んで、もう３０年近くなります。作り方だけでなく、文庫での子どもたちの声が綴られています。
懐かしい時代となってしまったかな。

4、「手づくりおもちゃを１００倍楽しむ本」　木村　研編著　いかだ社 2015

ひとりでも楽しめますが、集団で遊ぶとより楽しい、簡単手づくりおもちゃ。サブタイトルに「５分間もかからない！」とあります。確かにすぐ作れ、待たせません。

5、「牛乳パックで作る小物」　「アイデアいっぱい　牛乳パック　ペットボトル　空き容器　リサイクル」　　内藤　朗　編集　ブティック社

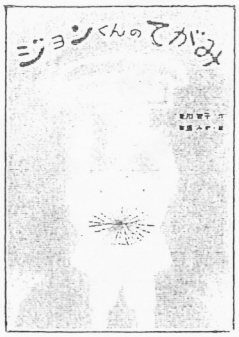
おもちゃというより、生活小物がたくさん紹介されています。似たような本がこの出版社からたくさん出ています。手づくりが好きな小学生向きです。もちろん大人も。今年の夏は忙しくて、夏休みの宿題には間に合いませんでした。ごめんなさい。

【 本の紹介 】

ふうせん文庫　海老ヶ瀬正三

『森の本やさん』　肥田美代子・文　小泉るみ子・絵
文研出版　2015

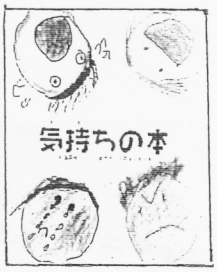
森のおくに小さな本やさんがありました。主人のくまじいさんは本のことは何でも知っていて、お昼になると子ども達に本を読んであげるなど、まるで「森のくまさん文庫」のように動物たちから慕われています。ところがある時、おおあらしがやってきて、本やさんはぺちゃんこにつぶれ、おじいさんも寝込んでしまいます。そこで、動物たちが力を合わせて・・・。
くまさんの表情がとてもステキに描かれています。



『ジョンくんのてがみ』　新川智子・作　市居みか・絵
童心社　2016

おてがみの大好きなジョンくんは、おばあちゃんから来た手紙に大喜びで、早速返事を何と大きなドングリに書きます。でも、そのドングリはつまずいたひょうしにポーンととんでいってしまいます。そこで今度は、木の葉にお手紙を書きます。お使い先の八百屋さんのタマネギの皮にも書きます。それらがつながり合って・・・
おばあちゃんが訪ねてきて大喜びのジョンくん。さて次に何に手紙を書くのでしょうか？
以前、文庫連の総会後に市居さんのお話を伺いましたが、温かくほのぼのとした絵にあらためてほっこりします。

『気持ちの本』　作・森田ゆり　絵・たくさんの子どもたち
童話館出版　2003



人にはたくさんの気持ちがある。うれしい、悲しい、くやしい、さびしいしあわせ、こわい・・・いろんな気持ちを4才から15才のたくさんの子どもたちが描いています。それぞれの気持ちについて考えていく絵本です。言葉にできない気持ちのあることや、人の気持ちを聞くことについても考えていきます。子どもたちと見ながら話し合うきっかけになる本だと思います。
発売はだいぶ以前ですが、今年3月で27刷発行となっています。

『走れ、セナ！』　香坂　直・作
講談社　2005

小学5年生で陸上部所属の女の子が主人公。人数が少なく顧問が休むことになり、突然陸上部の解散を告げられる。ショックを受けるが周りの生徒を巻き込みながらも何とか競技会開催までこぎつける。学校でのことや家庭でのことに悩みながら、前向きにタイトルのごとく走って行く。セナの名前の由来はあの有名な・・・
実は、この本は文庫に来る本好きな子が「おっちゃん、おすすめの本やで！」と、この夏紹介してくれた本です。主人公と自分を重ねながら読んでいるんだなあ、と思いましたが、十分紹介したい気持ちがよくわかる本でした。

「片山　健」の絵本で秋から冬へ、そして…

（個人会員　真弓美矢子）

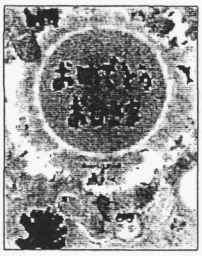
『タンゲくん』片山　健、福音館書店

片山　健といえば、代表作は何といってもタンゲくん。表紙をよく見ると、秋の草花に囲まれています。季節は秋。

ある日、わたしのうちに入って来て、当たり前のようにうちの猫になりました。とてもクールな雰囲気のタンゲくんは姿が見えない間、何をしているのか不安です。でも、帰ってきたタンゲくんはわたしの作ったごはんをおいしそうに食べ、わたしのおなかの上で丸くなります。そんなタンゲくんがわたしは大好き。

満月の夜、狂ったように走り回るタンゲくんや猫同士のけんかの場面などダイミックな絵に圧倒されますが、洋服の柄や座布団・カーテンの模様・レース編みなど細かい部分も丁寧に描かれていて、絵の持つ力を存分に味わうことができます。

～秋の次は冬、正月です。



『おめでとうおひさま』中川ひろたか・作、片山　健・作　小学館

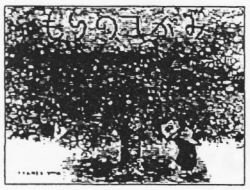
おひさまは海から登場して、おめでとうみんな！
おひさまは山からも登場して、おめでとうみんな！
そしてみんなに聞きます。新しい年になってみんなはどうしたいか。
なるべくけんかしない、なるべくきらいっていわない…
おひさまはなるべくっていうのがいいねといってくれました。
本当に「なるべく」がいいのでしょうね。何事も無理を重ねるのがよくないのかもしれません。おひさまはなるべく顔を出すようにするといってくれました。最近の異常気象を思う時、おひさまの輝く穏やかな日々の多くあることを願わずにはいられません。
１頁目の暗い空、２頁目の茜射す空、３頁目におひさまはぽん！と登場します。小さな子どもたちもお気に入りで、頁が進んでいくと、登場したおひさまを指差しして、追って行きます。海のみんなや山のみんなのしあわせそうな顔を見ていると、生きていることの喜びを再認識です。

お正月過ぎれば寒さも本格的、でも春はそんなに遠くはありません。

『いいことってどんなこと』神沢利子さく、片山　健え、福音館書店

ぴちゃぴちゃ雪どけのしずくの音にさそわれて、女の子は窓をあけてみました。はねて、おどって、うたって、しずくはとってもうれしそう。「いいことがあるからよ。」ことりさんもうれしそう。女の子はおっかけて林の中まで来てしまいました。「いいことってどんなこと？」川も風もりすもみんなうれしそう。女の子が見つけたいいものは何？かすかな春のおとずれの予感に誘われて、思わず家から出てきてしまう。風や水の音、自然に耳を傾けることのできる、この雪国の女の子はステキ。

『もりのてがみ』片山令子さく、片山　健え、福音館書店



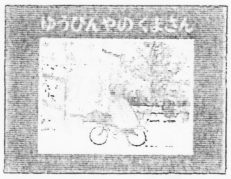
同じく春を待つお話、寒い冬、外で遊べないひろこさんは森のともだちみんなにお手紙を書いて、森のもみの木に下げておきました。「春になって、森のすみれが咲いたら、もみの木の下で待ってます」果たしてみんな読んでくれるのかな？

今冬は寒さ厳しい予報、私たちも体調に気をつけて、すみれが咲くのを待ちましょう！～

大好きクリスマス絵本

滋賀県子ども文庫連絡会　笹　洋子

『ゆうびんやのくまさん』　フィービとセルビ・ウォージントン　さく・え
まさきるりこ　やく　福音館書店　1987



あるときはパンやさん、またある時はうえきやさんのくまさん。この時期はゆうびんやさんです。クリスマス・イブの朝は大忙し。みんながくまさんの配達を、待っています。1日の仕事を終えてうちに帰ると、くまさんにも小包が届いています。たったひとりで暮らしているくまさんですが、パーティへの招待状やたくさんのプレゼントをみると、みんなに愛されていることがわかりますね。

『どうぶつたちのクリスマスツリー』　ジャン・ウォールさく　レナード・ワイスガードえ
こみや　ゆう　やく　好学社　2016

深い森の奥で動物たちがみんなでもみの木を飾り付けます。輝く星の光に動物たちは祈りをささげ、みんなで作ったもみの　木は一晩中きらきら輝いていました。

多彩な絵を描くワイスガード。この絵本は72歳の頃に描かれたそうですが、『たんじょうびおめでとう！』に似た色彩でとても美しい絵本です。直接的には宗教色は感じられませんが、随所にそれらしい逸話や絵が見られます。

そもそもクリスマスって何の日？という疑問に答えてくれるのはこの2冊です。

『クリスマス』

バーバラ・クーニーさく
安藤紀子やく　ロクリン社
2007

『クリスマスってなあに』

ジョーン・G・ロビンソン文・絵
こみやゆう訳　岩波書店
2012

クリスマスのはじまりや習慣、行事や文化をどちらも落ち着いた色調で描いています。
『クリスマスってなあに』は子どもたちに語りかけるように書かれていますので親しみやすく、クリスマスカードや飾りつけなど真似をしてみたくなります。
『クリスマス』は以前別の出版社から出ていました。再版されて、クーニーのファンとしては嬉しい限りです。

おとなも子どもたちも穏やかで幸せな一夜が迎えられますように！

2017年がスタートしました。今年もみんなが元気で心豊かに過ごせますように。
ここで紹介する絵本は小学1年生の娘と一緒に選びました。

『おばあちゃんのおせち』（野村たかあき／作・絵　佼成出版社 2008）

新年ということで、まずはおせち料理。以前は祖母や母が作っていましたが、最近は購入することも多くなりました。この本では商店街のお店に材料を買いに行って、おばあちゃんにおせち料理の作り方を教えてもらいます。昔ながらのお正月の楽しさやあたたかさが温もりある版画で表現されています。巻末には、料理研究家・堀江ひろ子さんによる、おせち料理の由来の解説が付いています。日本の伝統を受け継いでいきたいものですね。

『おもちのおふろ』（苅田澄子／作　植垣歩子／絵　学研　2014）

おせちの次はおもちの話です。表紙を見るだけで、にこにこあったかそうな雰囲気が伝わってきます。醤油の足湯にきなこの砂風呂、トースターのサウナ、最後のおふろは…。おふろやさんに貼られたポスター、小物など、細部に至るまで丁寧に描かれていて、読むたびにいろいろな発見があり、子どもから大人まで楽しめます。

『ねえ　カレーつくってよ』
（早坂優子／作　ひらのたつお／絵　視覚デザイン研究所　2010）

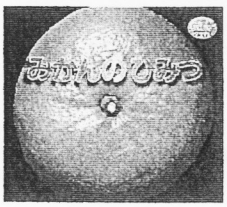
「おせちもいいけど、カレーもね」というテレビコマーシャルを思い出しました。お母さんが準備しているおさかなじゃなくて、カレーが食べたいこぶたくんは自分で材料を調達することに。畑へ野菜をとりに行ったり、なんと動物園に行ったり。
娘が 3、4 歳の頃、何度も図書館で借りてきた本です。

『ピッツァぼうや』（ウィリアム・スタイグ／作　木坂涼／訳　セーラー出版 2000 ）

カレーの次はピザです。雨がふって、外に遊びにいけないピートはご機嫌ななめ。そんなピートを見て、おとうさんはあるアイディアを思いつきます。
文庫のおはなし会で実演しながら読んだところ、ピザ生地になりたい子が続出。何度も生地をこねたり伸ばしたり、紙で作ったチーズをかけたり、それはそれは大盛り上がりでした。

『うれないやきそばパン』
（富永まい／文　いぬんこ／絵　中尾昌稔／作　金の星社 2012 ）

娘の大好きなやきそばパンが登場。舞台は昔ながらのパンやさん。あんパン、ジャムパン、カレーパン、売れ残って捨てられたパンたちがごみ箱で嘆く様子がとても切なく感じられます。ところが、デニッシュのポールが「ボンボンボンボンボンボンジュ～ル」とやってきてからはお客さんが増えたものの、やきそばパンのピョンタはますます肩身がせまくなります。娘が文庫で何回も何回も借りるほどのお気に入りの絵本でとうとう最近購入しました。文庫でもよく借りられています。



『みかんのひみつ』
（鈴木伸一／監修　岩間史朗／写真　ひさかたチャイルド 2007 ）

最後はみかん。冬はやっぱりこたつでみかんですね。実の特徴やなり方などを美しい写真で紹介されています。みかんのスジの役割や皮をむかなくても房の数を当てられる方法など、知っているようで知らなかったことも載っていて、小学校での読み聞かせでも人気の本です。

おせちにおもち、カレー、ピザ、焼そばパン、そして最後はみかん。おなかいっぱい。あ～ しあわせ。

（風の子文庫　河邑真理）

「３．１１を忘れない！」

2017年2月

東日本大震災から6年。少しずつ記憶が薄れていく中で、今も悲しみや苦しみを抱えながら明日へと命をつないでいる人々がいる。絵本を通してあの日のことをいつまでも忘れない。子どもたちに伝えたい。

『希望の牧場』　（森絵都／作　吉田尚令／絵　岩崎書店　2014年）

東日本大震災後、発生した福島第一原発事故によって「立ち入り禁止区域」になった牧場にとどまり、そこに取り残された牛たちを守り続けようと決めた牛飼いの姿を描いた絵本です。沢山の人や動物の生活と命を翻弄した原発事故の重みを改めて思います。

『ハナミズキのみち』（淺沼ミキ子／作　黒井健／絵　金の星社　2013年）

大震災で家族との思い出がつまった海に、命を奪われた少年。悲しみに暮れる母に少年の祈りの声が届きます。
「みんなが二度と悲しまないように避難路にハナミズキを植えて」と。

復興を願い、命のつながりを祈る絵本です。

『はしれ、上へ！つなみてんでんこ』（指田和子／作・伊藤秀男／絵　ポプラ社　2013年）

大地震直後、海岸から500m地点にある学校の生徒600人が山への坂道を2kmにわたり走って逃げました。中学生は小学生と手をつなぎ、近くの園の園児たちをのせた台車をおしながら。ほとんどの子どもが津波から逃げのびた、「釜石の奇跡」といわれた実話絵本です。

『ぼくは海になった－東日本大震災で消えた小さな命の物語』　（うさ／作・絵　くもん出版　2014年）

３．１１で犠牲になった人は約18000人、動物たちの数は正確に把握されていない。亡くなった動物たちの命も、その命を想う人にとっては、等しく大切な命だった。
この絵本は、ミニチュアダックスフントのチョビと家族の物語です。

〔個人会員　翁長まゆみ〕

今月は、こぎつね文庫の狐野やよいさんのおすすめ3冊と、
先日、田島征彦さんからいただいた、子どもたちとの合作絵本2冊をご紹介いたします。

『三月ひなのつき』石井桃子さく・朝倉摂　え　（福音館書店）

私が、3月3日に出産したときにお祝いにいただいた。それまで子どもの本にはあまりお目にかかることなく、大人になってしまったので、絵本との初めての出会いに等しい。その時でさえ20年は経てはいたが、初版から50年以上たった今でも販売されている。ここに登場する、思い出のおひなさまの描写は、朝倉摂さんの美しい絵で再現されている。それは値段ではかれない、作る人の思いがこもったものであり、そのことを大切にしようとする母と子の物語である。時代を超えて読み継がれたい本。

『ちくま評伝シリーズ　石井桃子』（筑摩書房）

今年1月に石井桃子さんのドキュメンタリー映像を見てから、あらためて私たちの文庫活動は石井さんがおられたからだ、という印象を強くした。もちろん児童文学作家でもあり、すぐれた翻訳者であったから、石井さんが関わった本が1冊もない文庫はありえない。その作品だけでなく、岩波少年文庫や福音館の絵本がなぜあのようなすばらしいラインナップだったのかということや、そもそも「児童文学」という分野そのものを石井さんが切り開いてくださったことがよくわかる。巻末エッセイの中島京子さんの話に頷くことしきり。

『草と木で包む』 U.G.サトー文と絵　後藤九・酒井道一写真（福音館書店）

見回せば私たちの便利で快適な生活は、ゴミの山である。それはたとえば、毎日の食べ物を包む材料が、土に還らないものになったから。自然の素材で包んだものは、殺菌力や香りなどがあり、形も美しい。だがそれは長い間多くの人々が工夫を重ね、今の形になって現在の私たちに届けられている。そういう名もなき人々が伝えてくれたつつましい生活が、現代の経済至上主義に呑み込まれ姿を消していく中で、かすかな抵抗を示しているようなこの包み。デザイン性と生活の知恵にあふれたこの文化を、私たちは失ってから気づくのか。

こぎつね文庫　狐野やよい

『とこよのくにのうらしまさん』 作：伊根町立本庄小学校の子どもたち・たじまゆきひこ
（くもん出版　2012）

京都府丹後半島の伊根町に伝わる浦島伝説は、全国に伝わるものの原形として、今から1400年前に生まれたとされています。第26回国民文化祭で「民話の祭典」が伊根町で開かれることになり、浦嶋伝説の絵巻を伝える宇良神社（浦嶋神社）のすぐ近くの本庄小学校の子どもたち35人と田島征彦さんが、絵本を一緒に作ることに。子どもたちが描く表情の豊かな絵と田島征彦さんの独特の色合いがマッチして生まれた創作絵本です。結末は、子どもが考案したかわいく、あたたかいお話で終わっています。

『かんこうさんが　ふってきた』 作：大阪市立豊崎小学校のこどもたち
おてつだい：たじまゆきひこ・うちべけいこ
（くもん出版　2016）

田島征彦さんとお孫さんが通う豊崎小学校の全児童（155人）との合作絵本。豊崎小学校はプロの能楽師から能楽を学び発表するという能楽体験をしている。そこで、地元に馴染みのある菅原道真（かんこうさん）を描いた「雷電」という能をモチーフに、身に覚えのない罪やいじめに苦しむ大人や子どもの心をどうしたら和らげれるかをテーマにしている。かんこうさんと子どもたちがであって～登場人物の心や表情の豊かさが伝わってくる、全児童155人のエネルギーあふれる絵本です。

たなばた文庫　島谷千織